

PIC シンボルを用いた LL ブック制作の試み

榎場 政晴^{*1}

コミュニケーションツールとして開発された PIC (Pictogram Ideogram Communication) のシンボル及び JIS 絵記号を語彙の理解、文脈の理解を支援するツールとして利用し、LL ブックの制作を試みた。本試みでは、単語にふりがなを付けるようにシンボル配置することにより、文字の固まり(単語)の意味の理解を促そうと考えた。その結果、文章の意味が捉え易くなった。また、注視や追視が苦手、朗読がうまくできない対象児の読書に対する苦手意識を軽減することができた。

<キーワード> 特別支援教育, PIC (Pictogram Ideogram Communication), シンボル, 電子絵本

1. はじめに

LLブックは、スウェーデン語で「やさしく読みやすい本」という意味を表す単語の略である。スウェーデンでは、1960年代から知的障がいの人たちが他の人と同じように読書をする権利を保障するための政策がとられ、やさしく読める図書センターから年間約 30 冊程度の LLブックが出版されている。

日本においても日本ライトハウスを中心にマルチメディアDaisyのように音声による支援を行うものや拡大図書のように文字を大きくしたものなどの出版が行われている。また、「ふりがな」をふったもの、シンボルでの表示をしたものなど多岐にわたって、やさしく読みやすい本の研究や開発が行われている。そのような取り組みが行われる中で、2005年には、第一回目のLLブックに関するセミナーが大阪市立中央図書館で行われている。そして、2006年には、大阪府立金剛コロニーから「ひろことまゆこの2人だけのがいしゅつ」というPICのシンボルを用いたLLブックが出版されている。

ここで、シンボルを用いた LL ブックは、他の LL ブックとは違い、その本に書かれた文章そのものをシンボルで表すのではなく、そのページのイメージや、書かれた文章の要点、キーワードをシンボルで表す形式がとられている。そのため、文章を読むための支援になるもの、すなわち、文中の語彙をシンボルで説明したり、語彙の意味をシンボルで表すような表記をしたものは、見あたらなかった。

そこで、筆者は、シンボルを用いて語彙の意味理解を深めたり、朗読、文章の読解の支援を

したりすることができる、LL ブックの制作を試みることにした。このような LL ブックは、国語教材にも活用できると考えたからである。

2. シンボルの選定

シンボルを用いた LL ブックの制作に当たっては、PIC の シンボル及び、JIS 絵記号を用いることにした。PIC は、カナダの言語聴覚士であるサバス・C・マハラジ氏によって考案され、1990 年頃藤澤和子氏によって日本に紹介されたシンボルである。JIS 絵記号は、PIC を元にシンボルの描き方を標準化し、2005 年 4 月に公表された日本工業規格「コミュニケーション

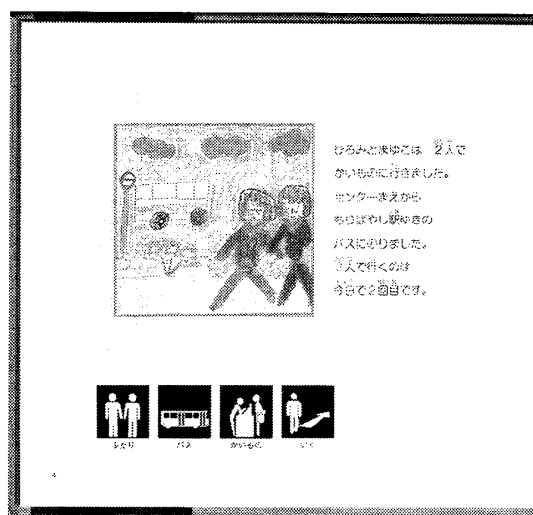


図1. 「ひろことまゆこの2人だけのがいしゅつ」より

*1 Makiba, Msaharu : 大阪府立茨木支援学校 e-mail= makiba@tcn.zaq.ne.jp

支援用絵記号デザイン原則(JIS T 0103)」に載せられた参考資料のピクトグラム 313 個である。

PIC 及び、JIS 絵記号は、ともに黒地に表したい内容を白抜きで表す面画である。JIS では、白黒の反転も認められている。また、PIC の表現方法には、建物を表す場合は、五角形の家型の線で囲む、部屋は、四角形の線で囲む等のルールがある。その他、表したいものを白抜きにするというルールから、強調したい部分のみを白抜きにするという表示方法もある。たとえば、頭痛の場合は、身体の輪郭を線で描き、「痛い頭」を白抜きで表示するということである。そして、JIS 絵記号にもこれら PIC のルールに準じているものが多い。

このように、視覚的に分かりやすいルールがあるため、LL ブックを制作したり、ことばの意味などを教える教材として利用したりするシンボルとして PIC 及び JIS 絵記号が適切であると考えた。

3. シンボルを添えたテキスト制作の考え方

語彙の意味やその文章がどのようなことを伝えようとしているのかを理解するための支援が可能な LL ブックを制作するための手続きとして、次の3点を考慮した形式にすることにした。

- ①ふりがなのようにシンボルを単語に添える
- ②文の意味を表す重要な単語にシンボルを添える
- ③助詞、接続詞は、扱わない

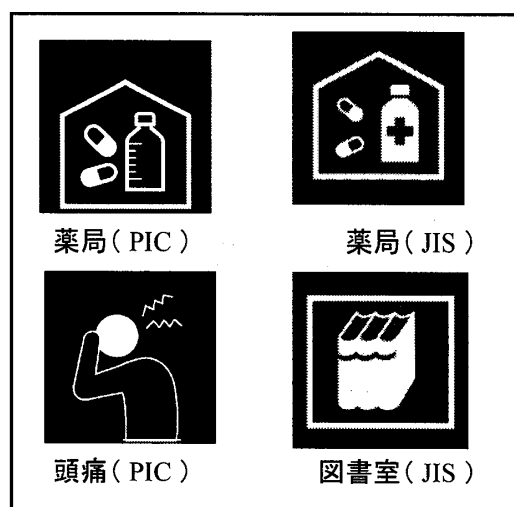


図2 PIC、JIS 絵記号の例

また、文字の習熟度や、語彙の理解度によって、一行に配置するシンボルの種類やシンボル数の検討を行った。その結果、対象児が文字が十分獲得で来ていない場合は、文の意味が理解できるように最小限のシンボル数で表すことにした。そのため、LL ブック化する文がどのようなことを伝えようとしているのかを示す代表的な語彙もしくは、重要な語彙にシンボルを添えることにした。そして、習熟度に合わせて一文あたりのシンボル数を増やし、文章の意味を捉えられるようにしようと考えた。

次に、LL ブック化する作品についての検討を行い、次に示す観点を基に作品を選ぶことにした。

- ①短い文で、構成されている作品
 - ②登場人物が最小限の作品
 - ③話が分かりやすく、馴染みやすい作品
 - ④ことばの繰り返しやリズム感のある作品
- 以上の観点を考慮し、「ぞうくんのさんぽ」(なかのひろたか、福音館書店)を LL ブックを制作する作品として利用することにした。

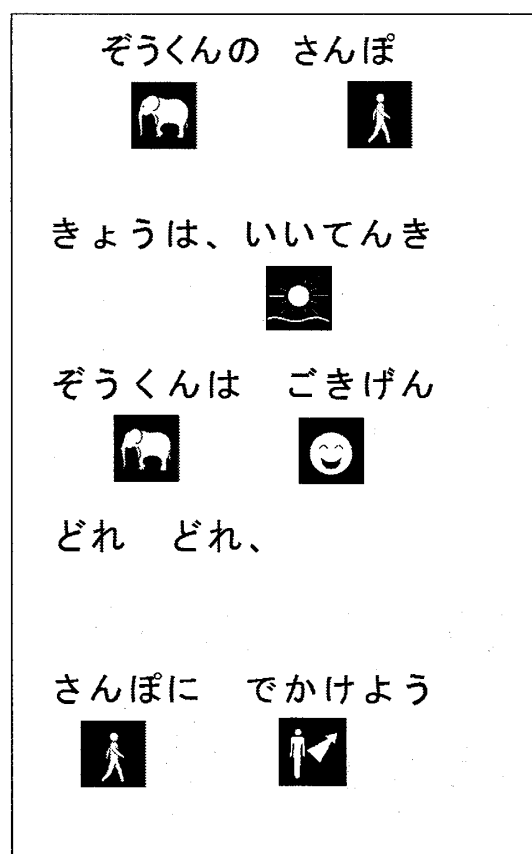


図3 ぞうくんのさんぽ LL ブック化の例

課題研究 9-2

4. 「ぞうくんのさんぽ」の事例

この作品は、登場する動物は、ゾウ、カバ、ワニ、カメの親しみやすい4匹の動物であるとともに、ストーリーは、登場してくる動物が、順番に背中に乗っていくという単純な構成になっている。そして、一度出てきたキャラクターは消えないで残るという特徴がある。

また、一文が短く、子どもたちにとってなじみがあると思われる語彙で構成されている。さらに、最小限の語彙で一文が構成されている。

「ぞうくんのさんぽ」では、「誰が」「何をした」という語彙のみにシンボルを添えることにした。「ぞうくん」、「かばくん」、「わにくん」、「かめくん」などの動物の名前は、学習活動などで見たり、聞いたりする機会が多く、それにシンボルを添えることによって「語彙」と「シンボル」が対になっているということが想起し易いと考えた。同じように、なじみがあると思われる「さんぽ」「いいてんき」「でかけよう」という語彙にシンボルを添えることで、イメージとシンボルの関係が理解がしやすいと考えた。

一方、PIC や JIS 絵記号には、「いっしょ」や「ちからもち」、「カバ」、「どぼん(池に落ちる)」など LL ブック化するために必要なシンボルがなかった。そこで、まず、PIC や JIS 絵記号で、違う名称で使われているものの中で、これらのイメ

ージに合う図柄のシンボルを転用することにした。さらに、転用が不可能なシンボルについては、「コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則(JIS T 0103)」に基づいて新たに制作することにした。その他、背中に乗るという行為は、ゾウの上方にカバを配置して上に乗るという表現を行うことにした。

5. 「おむすびころりん」の事例

「ぞうくんのさんぽ」は、文が表している内容の理解を目的としたので、次は、「おむすびころりん」を利用し、文を読むことを支援できる LL ブックの制作を試みることにした。

「おむすびころりん」では、できるだけ多くの語彙にシンボルを添えるようにした。また、様子を表す語彙のイメージが分かるようにも配慮した。「おむすびころりん」においても、ころりん(転がる)や、餅つきのように PIC や JIS のシンボルに無いものは、新たに制作した。一方、PIC は、原則シンボルの上下どちらかにシンボルの名称もしくは、意味することばを表示することになっている。そこで、「おむすびころりん」では、シンボルに名称を付けた状態で用いることにした。シンボルの名称については、「ぞうくんのさんぽ」の

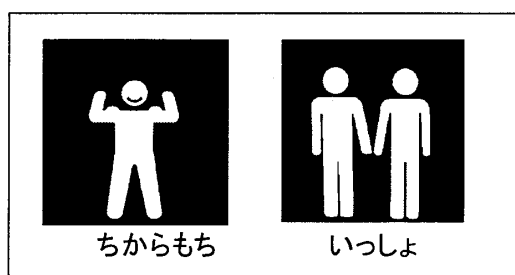


図4 転用したシンボル例

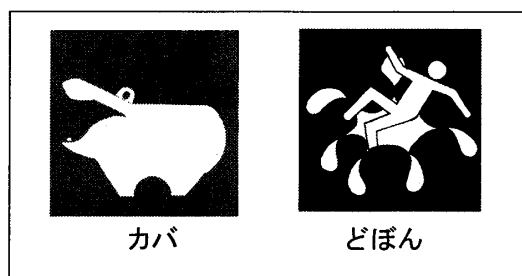


図5 制作したシンボル例

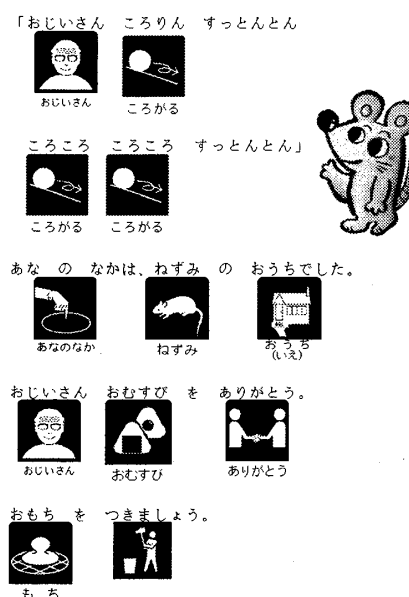


図6 おむすびころりんの例

ときと同じく、シンボルを転用して利用した場合には、元の名称ではなく、転用した意味の名称を付けた。また、「ころりん」と「ころころ」という語彙は、ともに「転がる」という様子を表すものであるので、同じ「ころがる」というシンボルを添えた。餅つきについては、「べったん、べったん」という擬音を連想しやすいため、「つく」という動詞と「べったん」という擬音は、同じシンボルを用いた。

6. 指導について

シンボルを添えたテキストを使った指導するときには、「ゾウ」という単語が出てきたらゾウのシンボルを指さしさせるようにし、単語とシンボルを確認させながら朗読をおこなうようにした。

このように、シンボルの確認を行うことによって、語彙の持つ意味の理解を促すようにした。また、対象児がどの程度ストーリーを理解しているのかを確認するために、これらの作品を朗読した後に、朗読劇として演じさせた。そして、ストーリーの理解が十分でない場合は、劇化を通してストーリーの理解を促すようにした。

7. 結果と考察

「ぞうくんのさんぽ」では、ひらがな文字の獲得が十分ではなく、文を読むことが難しかった子どもやひと文字、ひと文字を拾い読みしていた子どもが、シンボルを確認しながら同じグループの子どもと一緒に音読することができるようになった。また、ストーリーの内容理解ができ、「ぞうくんのさんぽ」を劇化したときには、ストーリーの進行に合わせて人形を動かし、劇に参加する姿も見られた。

一方、「おむすびころりん」では、シンボルを確認しながら読むことで、注意の集中が難しく、すぐ、どこを読んでいるのかが分からなくなることが頻繁にあった子どもが、今どこを読んでいるのかが分かるようになり、同じグループの子どもと一緒に音読ができるようになった。さらに、上記の作品以外にも数編シンボルを用いた LL ブックを試作し、指導を行ってみたが、同様の結果を得ることができた。

このように、語彙にシンボルを添えた LL ブックを利用することで、十分文字を獲得していない子どもや文字を読むことが苦手な子ども、さらに、集中が続かず、音読の途中でどこを読んでいるのかが分からなくなってしまう傾向にある子

どもが、シンボルを頼りにではあるが、文字を読んだり、どこを読めば良いのかが分かるようになるということが示唆された。

さらに、文字を読むことが苦手であるなどの理由から、今まで、あまり本を読みたがらなかった子どもが、本を読むことに抵抗が少なくなり、自分から文や本を読むようになるという事例もみられた。また、語彙にシンボルを添えることで、語彙の意味理解を支援することができ、ストーリーの理解を容易にすることができるということも示唆された。

その他、ひらがなで書いた文を、漢字で表示して欲しいと要望する子どもが現れるなど、読書や音読だけではなく、文字の理解に対しても自信を高め、少し難しいことに挑戦してみようという意欲を持たせることができたと思われる。

このように、語彙にシンボルを添えた LL ブックを利用することで、文字や文章を読むことに苦手意識を持ち、文字や文を読むことに失敗体験を重ね、自信を無くしていた子どもに「自分も読めた」「自分も読める」という成功体験を持たせることができると考える。

今後の検討課題として必要なシンボルの開発がある。また、シンボルを用いたテキストの指導方法の検討が必要である。一方、電子絵本としての利用などについても検討していきたい。

文献

- (1) 藤澤・服部ほか, LL ブックを届ける、読書書房, 2009
- (2) 藤澤・岡田・榎場, あそんでつくってコミュニケーション, エンパワメント研究所, 2007
- (3) 大阪府立金剛コロニー, ひろことまゆこの2人だけのがいしゅつ, 清風堂書店, 2006
- (4) 財団法人日本工業規格, コミュニケーション支援用絵記号デザイン原則 (JIS T 0103), 2005
- (5) 藤澤ほか, 日本版 PIC 活用編、ブレーン出版, 2001
- (6) なかのひろたか, ぞうくんのさんぽ、福音館書店, 1977